



手塚英孝

落葉をまく庭

手塚英孝

落葉をまく庭

東邦出版社

手塚英孝●落葉をまく庭

昭和四十八年四月二十日 発行

定価 六八〇円

著者 手塚英孝

発行者 藤山真人

発行所 株式会社 東邦出版社

東京都新宿区戸塚一〇三五四

電話東京(二〇二)七六三一〜三

振替 東京 八五二七五

落葉をまく庭 ■ 手塚英孝作品集



目次

父の上京	5
停留所にて	41
葉	51
予審秘密通報	61
「赤旗」地下印刷	133
落葉をまく庭	171
虱	219
あとがき	277



父の上京





1

父が弟の政吉をつれて上京したという松本菊代の知らせには、あまりとつぜんのことで恒夫はまったく困惑した。

姉にあてた手紙が、こうした結果になったということは、すぐ頭にひらめいたが、どんな考えで父が上京してきたのか、松本の話の範囲では、はっきり知ることができなかった。

場合が場合だけに、恒夫は、呆然として思いまどっていたが、激昂しているらしい父のようすや、遠い目黒の郊外から三田の隠家まで、晩おそく危険を冒して知らせにきてくれた松本の立場を考えると、一刻の猶予もできなかった。

彼は決心して、父に会う場所と時刻を松本と打ちあわせた。

話がすむと、松本は腕時計をみていそいで立ちあがった。そして、ちょっとためらいな

がら、す早く帯の間から財布をとりだして、いくらかの小銭を恒夫の机の上においた。急にわれにかえって、あわててそれを押しとめようとす恒夫をふりきるようにして、松本は障子をあけて階段を降りていった。

恒夫も跡を追って下宿をでた。

一九三三年四月中旬の風のある寒い晩だった。賑かな通りの商店街もほとんど鎧戸をおろし、通行人らしい姿もまれだった。手拭をぶらさげた若い店員風の二人づれが駒下駄の音をきませながら、いそぎ足で恒夫たちを追い越していった。

田町駅にぬける横丁の曲り角で松本は別れをつげたが、恒夫は黙って暗い路地を送っていった。数カ月らい、たび重なる迷惑にも、いやな顔もせず、いろいろと心をくだいてくれている松本にたいして恒夫は感謝の念をこえた心の負担に苦しみはじめていた。しばらく前から恒夫は、松本の安全のためにも、これまでのような個人的シンパとしてのつながりをたって、松本の境遇にふさわしい適当な分野で働いてもらいたいと思いつながら、切実な現状からついのびのびになってきたことが今度の問題で、恒夫の考えを決定的なものにした。

田町駅の灯のみえる大通りへでると、恒夫はあつく礼をいいながら、今後どんな場合にも、決して直接には下宿を訪ねないように繰り返しかえし松本に頼んで別れをつげた。

ショールで目ぶかく顔をつつみ、いそぎ足に車道を渡ってゆく松本の後姿を、恒夫は歩道のくらがりなたたずんで、しばらく見送っていたが、松本の姿が闇に消えると、急にとり残されたような不安にうたれながら、彼は同じ路を懐手をしたままゆっくり歩いて引きかえしてきた。下宿の入口の路地で、彼はちよつと足をとめて、あたりに注意ぶかく気をくばった。それはここ一年來、本能的に彼の身につけてきた動作であった。

電燈がつけっ放しになっているがらんとした下宿の二階にもどると、恒夫はかえってぞくぞくするうすら寒さを肌身に感じた。南向に一間はばの高窓があり、両側は壁で、障子立ての出入口の傍に半間開戸の押入のついた六畳の部屋には、円本を二、三冊のせた小机が一つぼつんとあるだけだった。松本が机の端にのせていった小銭の固りがチカチカ目にしみこむようだった。彼はぐったりして、太息をもらしながら机のわきに体をまるめてごろりと横になった。

恒夫が非合法の状態になってからすでに一年の月日が過ぎていた。それはじつに恐ろしいほどの速さだった。すぎさってみると、まるでそれは二、三週間のできごとのようにさえ思えるのであった。

彼は、最初、東京地方の非合法文書の配布係の一メンバーであった。配布機関は独立したシステムになっていて、中央配布から定期的に流れてくる機関紙やパンフレット類を

二人の同志と分担して、各地区別に、あるいは特別な細胞毎に分類して、完全な包装につくりかえ、連絡で順次に手渡してゆき、紙代の回収をまとめ、中央の配布機関に渡すのがおもな任務であった。また、定期的な会合をもってお互の経験を交換しあったり、理論研究会もつづけていた。ときどき、地方委員の野村が出席して情勢の報告をしていた。

それは単調で、地味な、かなり忍耐を必要とするような性質の仕事であったが、また、いつも文書を持ち歩いているために、神経をすりへらすような労苦をとまらぬ任務でもあった。

はじめの二、三カ月、恒夫はひどく疲れた。くたくたになって宿にもどると、そのままぶっ倒れてしまうようなこともあった。しかし、熱心に、献身的に働いているうちに自然と、技術も習得し、非合法の困難な生活にもなれてきて、半年後には、時間の調節も巧妙になり、大胆になって、街中でスパイに尾行され、ピタリと物蔭に身をよせながら追跡してくるのを巧みに避けて逃走することもできるようになっていた。

恒夫たちは、だいたい、月々三十円程度の費用を支給されていた。

包装費、間代、食費、交通費、連絡につきかうそば屋、ミルクホールの勘定、時間の調節のためにはいる映画館などの料金をいれて、それで、はげしい生活をなんとか支えていた。

しかし、昨年十一月くらい、情勢はまったく一変した。

中央部が壊滅的な打撃をうけた。つづいて地方、地区の組織も一カ月にわたって、相当な破壊をこうむった。指導的同志の一人は逮捕後まもなく拷問のために殺された。恒夫と連絡のあった幾人かの人びともこの期間にほとんど逮捕された。恒夫は危いところで難をまぬがれたが、共に働いてきた地方配布責任者の吉田は、やはり同じ頃に逮捕された。彼は日本橋通りで昼間の街頭連絡中、数名のスパイに襲われ、格闘のすえ、がんにがらめに縛られたまま引立てられていった。

配布関係の被害はわりに小部分でとどまったので、一応の連絡は比較的短期間に回復された。つきつぎの情報で被害は全国にわたり予想以上大規模であることがわかった。天井から釣り下げられたり、一昼夜ぶっとおしの拷問で発狂した若い婦人の同志のようすも伝えられた。恒夫と連絡のあった幾人かの人びとのなかにも体の弱々しい婦人の同志もいた。いつもむっしりして、のそりのそり連絡にきていた職場の肥った人もいた。左腕のなにかなり年輩の瘦せた同志の面影が、ときどき、彼の脳裏にちらついた。

しかし、同じ配布の中村の無事だったこと、地方委員の野村が逮捕をまぬがれたことはなよりの喜びだった。野村は、数年らしいの親しい友人でもあり、恒夫にはいろいろな時代をつうじての指導的同志でもあった。

東京地方の再組織は、野村たちを中心に即刻着手された。恒夫は吉田のあとをついで配布責任者となった。大きな破壊をうけた直後の仕事はきわめて困難でなかなか容易なことではなかった。印刷所が破壊しつくされていたために出版物の発行が、相当な期間にわたって中断したが、その間も、空のベルトのように配布の連絡は定期的につづけられていた。しかし、もっとも直接恒夫たちの生活にこたえてきたのは、財政の窮乏による月々の給与が中断したことであった。

各自、それぞれシンパ網をつくり、活動を継続する方針がきめられたが、それは、かんに解決のできる問題ではなかった。はじめのうちは、わずかな持物を金にかえたり、知人の間を歩きまわって、しばらくは支えてきたが、しかしそれには、おのずから限度があった。しだいに、窮迫の度がふかまり、深刻になってきた。危険を感じても宿を引越して行く金がないばかりか、交通費や、食費にことを欠くような日さえ珍らしくなくなった。恒夫たちは、とぼしい金を互に分けあい、はげましあいながらたまたまい切り抜けていった。松本菊代の親身な支持がなかったら、恒夫は、もっと困ばしい状態におかれていたかもしれないかった。

松本は、二年ほど前、恒夫が働いていた経済研究所時代の研究会のグループで、シンパの一人だった。彼女は貧しい進歩的な物理学者と結婚していたが、熱心に恒夫たちの仕事

を蔭で助力してくれていた。一時、恒夫と中村が共同して一軒のアジトを構えたとき、松本は朝早く自宅から通ってきて、ほとんど二カ月の間、炊事や、主婦代りをひきうけてくれた。

恒夫のために、三田の下宿を探してくれたのも彼女であった。恒夫と月に二度、定期連絡をとって、そのたびに、いくらかの金を集めてとどけてくれていたが、しかし、恒夫の生活は、月を追ってしだいに食事にさえさしつかえるような日が多くなった。

いままで、極度に暮しをきりつめても、部屋代だけはきちんと払うことにしていたが、それもできなくなり、いつの間にか、二カ月ほどとどこおっていた。恒夫の下宿は、細君が玄関わきに、ささやかな髪結店を出していた。同宿人もなく、主人は、いつも地方へ出張して留守がちで、アジトとしては屈強の場所であったが、部屋代がとどこおりはじめてから、急に不安になった。生命保険に勤めているということにしていたが、身の周りのものほとんどなく、冬中火鉢もなかった。細君が不審に思いはじめているのではないだろうか、そればかり気にかかった。

近頃になって、恒夫は心から疲労を覚えはじめていた。おりおり、逮捕される日が、身近にせまってきたような気さえるのであった。

しかし、この状態は、彼ばかりでなく、中村の場合は、もっとひどかった。顔色も悪く



なり、しだいに青黒く痩せてゆくのが、連絡ごとに目についた。

二週間ほど前の昼すぎのことだった。

増上寺の境内で、恒夫は中村との連絡に珍らしく三十分も待たされた。やがて、いそぎ足で石段を登ってきた中村をみると、埃でよごれた黒い汗が顎の下まで垂れさがっていた。

「おい、いくらか持ちあわせはないか」

仕事の打合せがすんだあとで中村は、そういった。前の晩から飯も食わず、向島から歩いて芝公園まで連絡にきたのだった。恒夫もあいにく、二十銭ばかりしかなかった。二人は顔を見あわせたまま、しばらく黙って突立っていた。

その晩、恒夫は郷里で材木問屋に縁づいている姉に手紙を書いた。非合法活動者は肉親との文通を禁じられてはいたが、万やむをえぬ場合だった。彼は姉に、事情を訴え、内密にできるだけの金を都合して送ってくれるように頼んだ。義兄と、ことに田舎の父には厳重に秘しておいてくれるようにくりかえし懇願した。

文面は万一の場合を考え、細心な注意がはらわれてはいたが、姉にはすぐ判読できる内容のものだった。二、三日後、松本と相談の上、三人の人手をつうじて、姉からの返事がとどくように周到な工作をして、封筒も二重につくり、婦人の筆跡で、発信地も横浜にし